



左の君は

【サンプル号】

バランガ

左の君はたいそう雅だと評判である。ま、僕のことなんだけどね。

「さすがは左大臣のご子息、まだ準備のうちからここまで絢爛豪華とは。他ではこうはまいりませんまい」

僕にとっては当たり前の装飾を、父上の取り巻きの一人が必死で誉めたたえる。飾りつけは門から僕の部屋まで延々とあるので、さっきからずっとこの調子だ。

「いえいえ、そのようなことは...まあ、曲がりなりにも一人息子ですからね。初めてのことで父も勝手が分からぬのでしょう」

にしても誰だったかな、こいつ。知らない顔にも返事してやるなんて我ながらやっさしー。

「またまたご謙遜を。みな噂しておりますよ、ここまでの元服式は右大臣も及ばないではありませんか？」

「はっはっはっ困りますね、そんなはっきりと言われては」

んなこと言われなくても分かってんだよ。単に位というだけでなく、我が左大臣家は格式、実力、どれをとっても右大臣家を上回る。当然だ。成り上がりに負けてたまるか。父上も手を焼いているようだが、僕が参内した暁には京から叩き出してやる。思わずにやりと口角が上がる。さて、どういたぶってやろうかと妄想を膨らませようとしたら、間抜けな声に思考を遮られた。

「こんなとこに居たんですか狭霧様、さっさと戻ってこいって女房達かんかんっすよ」

この地味なのっぼは草野。僕の乳兄弟だ。

「うるさいな草野、お前もゆくゆくは僕の従者になるんだ。そういう細々したことで主人の手を煩わせるなよ」

「完璧な元服式にしたいって言ったの、あんたでしょうが。ほらとっとと行きますよ」

たいていの使用人は、たとえ猫がわんと鳴こうが僕に意見なぞしない。それだけの存在なのだ、左大臣というのは。その子息に軽口をたたける草野は文字通り兄弟同然であり、家族以外には唯一信用できる人間だ。今世の光源氏といっても過言じゃない僕の従者としては地味すぎるがな。

「あ、あの」

おっと、忘れてた。手を引かれながら、へのへのもへじに言ってやる。

「ではこれにて...元服式でお会いいたしましょう」

もうすぐこの狭霧が左遷してやるからな。

「いくら自分の邸でも、目の届かないところには行かないでくださいよ」

僕を引きずりながら草野がため息をつく。

「権勢を誇る左大臣の息子に、何かしようだなんて怖いもの知らずがいるわけないだろ」
従者というのは陰に日向に控えているものだが、こうもべったり張り付かれては子供扱いされているようでなんかむかつく。

「そりゃそうですけどね、世の中にはそのご威光とやらが分かんねえ奴らもいるんですって。昨日も中納言の邸に賊が入ったらしいし。あんた、中身はともかく見た目は小さいしなよっちいし、まるで子供なんだから人一倍注意しとかないと。なんかあったら俺の首がとぶんで」
はっきり、ちびだと言っている。握られた手に思いっきり爪を立ててやったが効果はなかった。くそ、なんでこんなに淡々としてるんだ。今に見てるよ、お前もその内こき使ってやるからな。じっとりした視線をものともせず、珍しく草野がほんのり笑う。

「ま。なんにせよいよいよ明日ですね、元服式。嚙まないよう祈ってます」